



キャンパスは琵琶湖。 テキストは人間。

このモットーを胸に
社会で活躍する卒業生の原点に迫るインタビュー

今回の県大の星は、2025 年に開催された大阪・関西万博のトイレ設計を手掛けた建築家・大野宏さん、小林広美さん。滋賀県立大学で建築を学んだお 2 人は、“残念石”を使った独創的な建築に挑みました。大学時代の思い出を振り返りながら、現在のお仕事や万博建築の裏側について伺いました。



小林 広美 こばやし・ひろみ

環境科学部環境建築デザイン学科 2014 年度卒業
滋賀県出身。一級建築士。滋賀県立大学卒業後、滋賀県内の設計事務所で経験を積み、住宅設計事務所「studio m!kke」を設立。現在は滋賀県を拠点に、住宅設計やリノベーションを通して、一人ひとりの暮らしに寄り添う家づくりを行っている。

大野 宏 おおの・ひろし

環境科学部環境建築デザイン学科 2014 年度卒業
環境科学研究科 環境計画学専攻 2017 年度修了
滋賀県出身。滋賀県立大学大学院修了後、NPO 法人「Studio on_site」を設立。土地の素材や地域に受け継がれる技術を活かしながら、その土地ならではの建築づくりに取り組んでいる。現在は国内外で活動するほか、大学でも教育に携わっている。

なぜ「滋賀県立大学」を選んだのか

小林…私は生まれも育ちも滋賀県で、建築を学びたいと思ったのは高校生からです。最初は工学部のイメージが強く、県大は候補に入れてなかったのですが、自分がやりたい住宅や都市など幅広い分野の建物の設計ができると知り、受験しました。

大野…僕も滋賀県出身です。両親が国公立に行けば 1 人暮らしをしてもいいと言うので、京都か滋賀の公立大学に絞られました。推薦入試があつて、高校から行きやすくて、建築学科があつて、公立であればいいという条件から、この大学を選びました。

身近な日常から建築の世界へ

小林…中学生ぐらいからファッションやデザインなどに興味がありました。私は理系で、デザインができる仕事がないか考えるようになりました。加えて、テレビでリフォームをする番組を見て、「おじいちゃんやおばあちゃんの家を綺麗にしてあげたい」という思いがきっかけで、建築をやりたいと思うようになりました。

大野…小さい頃からプロダクトデザインみたいな小さいデザインが好きでした。デザイン学科みたいなところが自分には合っていたのかなと思います。また、新興国と途上国の不平等を解消したいと考えるようになり、ものづくりで関われないかなと思うようになりました。井戸やトンネルなど、土木系になるとスケールが大きくなります。自分の好きなことと将来やりたいことの両方を考え、建築の道に進もうと思いました。

充実の学生時代

大野…僕は 2011 年入学で、東日本大震災が起きた翌月、環境建築デザイン学科に入りました。建物がすべて流されてしまったような状況の中で建築を学び始めた世代です。当時は各大学で復興支援のプロジェクト

クトが立ち上がっていました。僕も 1 年生の頃から建築学科の陶器造一研究室のプロジェクトに参加し、被災地の活動に携わり、そこから建築にはまりました。そこからインターンに行ったり、世界中の建築を見に行ったりしました。芦澤竜一先生の研究室に 1 期生として所属し、先生から与えられた課題を寝ずにやりながら建築を見に行ったり、外部のコンペにも参加したり、やることをすべてやるような建築生活でした。



▲大野さん 学生時代の様子

小林…私は県大に入る時に木匠塾（※1）という活動があることを知り、それをやりたいと思っていました。1 年生から 4 年生までずっとやっていましたね。あとはバイトしながら課題をやるような生活を送っていました。



小林さん 木匠塾の様子 ▼

現在の主な業務

大野…社会に対して意味のあることをすることが主です。自分たちの思想を押し出していくことと、社会に意義がある（経済的利益だけでなく、持続可能性や幸福度を高める）ことをする人の建築をすることの 2 パターンがあります。その中で小さいプロダクトから、大きい建築までの範囲の中で、ものづくりをしながらコミュニティも一緒に作ることに主な業務です。



台湾の蒸籠職人との製品開発の様子 ▲



▲大野さんの設計物 (Naiko 近江八幡市「まちや倶楽部」)

※木匠塾
木匠塾（もくしゅうじゅく）とは、地域の課題を木によるものづくりで解決することを目指す科目です。地域との関わりを重視し、設計から制作までを学生自身が主体的に行う、本学科の特徴的な科目の 1 つです。

小林…私は住宅や店舗など、主に個人のお客さんに対して仕事をしています。最近ではマンションのリノベーションの設計に携わっており、改装などの空間をデザインする業務を行っています。今後は、万博のつながりで規模が大きい建築もやりたいと考えています。――規模が大きい建築、例えばどのようなものを作っていたのですか？



▶作業風景（打ち合わせ）の様子
▶小林さんの設計物（Lidm hair design）

大学での経験が今につながる

大野…東日本大震災の経験を通して、その場にあるものを使い、現地の人と一緒に建築をつくることが僕のメインテーマになっています。大学在学中、フィリピンの被災地復興プロジェクトを行いました。危険を伴う場所でも、先生が背中を押して自由にやらせてくれましたね。近江楽座の「タクロバン復興支援プロジェクト」（※2）などの活動も含め、学生の挑戦を後押ししてくれる環境があります。これらの経験が今の活動に生きていると思います。

※大野さんは2015年、学生主体の地域貢献活動を行う近江楽座団体の一つ「タクロバン復興プロジェクト」を自身で立ち上げました。

オープンな環境で自由奔放に

小林…大学は琵琶湖が徒歩圏内にあり、ほかの大学と比べて緑が多いところが魅力です。あとは地域の人がふらっと行きやすいような門構えとか…。地域の人をオープンに受け入れる感じもこの大学の良さだと思います。今回の万博もいろんな人を巻き込んで一緒に話しながら物事を進めていきました。学生時代にこのようなことを経験してきたからこそ、すんなり受け入れられたと思います。地域に開けていることや、自然豊かで琵琶湖に近いところは魅力なのかなと思います。

大野…制限がすごい少ないと思います。先生も自由な人が多いです。通常であれば、できないこと、細かな決めごとがあるとあります。しかし、県大は広大な土地と、ゆとりとした環境があります。「自分がやりたいならやってみる」みたいな指導がありました。何でも挑戦という感じです。近江楽座もそうですけど、学生に挑戦させてくれる土壌が揃っているのは、他の大学と全く違うと思います。他には、先生との距離が圧倒的に近いですね。ご飯も一緒に食べるし、何か相談があったら研究室を叩けばすぐ聞いてくれるし、本当に貴重な大学だと思います。それが魅力です。

悔いの残らない学生生活を

小林…私はもっと学んでおけばよかったと思いました。大野くんは学生の頃からずっと建築人間っていうのが見て分かるぐらい建築建築していたんですけど、それに比べたら全然建築に打ち込めていなかったと思っています。社会に出て実務とかやると、もう時間がないですね。学生の時にバイトばかりしていたので、本当いろいろなところに行けばよかったとか、思い残すことや悔いなどがたくさん出てくるので、学生のうちはお金や時間がなくても、無理にでもやりたいことをやる、行きたいところに行く方がいいなと思いました。

大野…1つは小林さんが言っているようなことで、可能な限りいろんな場所に入り込んで、旅をして、いろんな人と会う時間がとても大事ですね。社会に出ると時間がなくてできないので。学生という与えられた環境の中で、バイトをせずに親のすねをかじる、かじれるならかじってやるくらいの気持ちが必要だと思います。もう1つは、いかに失敗するか。社会に出て失敗してもフォローしてもらえますが、学生は失敗してもノーダメージというか、フォローの強さが全然違いますね。学生時代にどれだけ失敗できるか、何か失敗すればそれだけ成長するから、成功するとか考えずに失敗をしまくる、自分のやりたいことをやりまくることが1番大事かなと思います。



小林…木匠塾で道具を作って、加工する材を切り出すところから、図面を描いて加工して、組み立てるという一連の流れを経験しました。現場を4年間経験したので、現場も理解しつつ設計ができるのは生かされていると思います。現場がある程度知った状態から業務に入れるので、これまでの経験が役立っていますね。

万博のコンペ選出とその舞台裏

大野…その頃はコロナ禍で日本にいました。石を使って、どうすれば自然の力や形を生かしたものを使えるかを探っていました。実験を繰り返し、ある程度のスケールの模型ができた時点で、これで実際に建ててみたいと思うようになりました。ちょうど若手の建築家を対象としたトイレと休憩所他の設計を募集する万博のコンペがあり、実現できるかもしれないと思い応募しました。このとき小林さんにも声をかけました。

小林さんはどのような心境でしたか？

小林…「マジか」という感じでした（笑）。とりあえず応募できる準備はできたんですけど、バタバタしながら作業をしたので、慌ただしく時間だけが過ぎていきました。案出しの時に石でやりたいって言われた時は、正直驚きました。グリッド状に柱を置いて設計することだけをしてきたので、石を使って建築するって、ちよつとどういうこと!!ってなりました（笑）。それを図面にしていくのはかなり苦戦しましたね。



▲万博建築物設計中の写真

Memories of school days

～県大時代の思い出～

大野 宏さんの思い出

東日本大震災の復興に携わった経験とフィリピンの貧困の地域に住んでいた時の記憶が1番大きい。様々な方と会う中で自分の知らない世界や自分の考えの変化を味わってきました。



▲2019年、フィリピンで建物完成を祝うお祭りの様子

小林 広美さんの思い出

製図室などでみんなで楽しく過ごした思い出が印象的です。みんなでIHや鍋を持ってきた、鍋パーティーしたりとか。家かなと思うくらい本当にずっとそこにおいてみんなでわいわいやってたので、それが1番記憶に残っています。



▲製図室（2026年現在の様子）



▲学生時代の様子

地球の形跡 /Traces of Earth (トイレ2)



この建築は、かつて大坂城に行くはずだった「残念石」を使用しており、約400年前に大坂城へ石を運ぶ人々の姿を描いた絵から着想を得ています。その絵が、労働でありながら祭りのような高揚感をもって石を運ぶ様子を描いていることから、今回の万博もまた「祭りのように」建築が生まれる場であってほしいという思いで、この石を使用しました。現代社会では、明確な計画や目標を先に定め、人や物を目標に向かって実現しようとする傾向がありますが、そこに無理や苦しさが生じていると感じています。本来は、その場所にある人や素材がもつポテンシャルを起点に、行き先は曖昧なまま自然にものが形づくられていくべきだと考えています。

大きな石そのものがもつ自然の力と、400年前の人間の営みの記憶が重なり合うことで、人為的に組み立てる建築とは異なる、より大きな力を宿した建築が生まれるのではないか。その思想が、この建築を生み出した理由です。

卒業生インタビュー「県大の星」は今号から県大 jiman に仲間入り！！

これまでの県大の星のバックナンバーは右のQRコードからご覧いただけます。

